

まちのポテンシャルと観光の二つの力

——新今宮界限と西成特区構想の今後にむけて——

松村嘉久

阪南大学教授

まちのポテンシャルとしてのエンターテイメント

まちの未来を切り開こうとするならば、そのまちのポテンシャルを見極めて、活かすことが大切である。釜ヶ崎もふくめて、新今宮界限、西成区北東部から浪速区南東部にかけてのJ・R新今宮駅周辺地域には、かつて道頓堀がそうであったように、エンターテイメントがいまでも地域に根づいている。パチンコや映画といったアミューズメントがエンターテイメントと呼ばれることも多いが、本稿でいうエンターテイメントとは、表現する側と見る側が相互作用し合いながら、両者が主体的に時空間を共有する現場である。アミューズメントでは見る側が声援を送っても何も変

わらないが、エンターテイメントでは現場そのものや、その後の展開さえも影響される。表現する側は見る側を楽しませようと、日々技能を磨き工夫を重ね、見る側は表現する側の一挙手一投足を見入り、喝采や賞賛、時には落胆や罵声で応じる。エンターテイメントのなかでも、新今宮界限のものは表現する側と見る側の距離感が近く、両者の一体感が高まったら、現場の盛り上がりは凄まじい。それは、たんなるエンターテイメントの域を超えて、表現する側も見る側も、いままさにこの時代をこの現場とともに生きていることを実感できるような、ライブでしか味わえない一期一会の時空間となる。エンターテイメントのなかでも、緊張感が溢れ相互作用の強いものを、私はとくに、ラ

イブエンターテイメントと呼びたい。

新今宮界限でいまでも楽しめる代表的なライブエンターテイメントは、大衆演劇、上方落語、音楽ライブである。

大衆演劇の劇場は、西成区に「オーエス劇場」(山王二丁目)、「鈴成り座」(鶴見橋二丁目)、「梅南座」(梅南二丁目)が、浪速区新世界に「浪速クラブ」(恵美須東一丁目)、「朝日劇場」(恵美須東二丁目)がある。五つの劇場はいずれも本格的な舞台を備えていて、初日、中日、千秋楽を除いて、毎日昼夜二回公演を行っている。毎回の公演は、舞踊ショー、お芝居、座長口上、舞踊ショーという流れで三時間強。公演が終わるといつも、役者全員が劇場前へでて、お客をお見送りして交流を深める。入場料は一三〇〇円から一五〇〇円、前売券なら一〇〇〇円か一二〇〇円、お芝居が終わるとデイスカウントする劇場もある。毎月入れ替わる劇団は、たいてい初日からその前日に劇場入りして、役者らは劇場に寝泊まりして地域で暮らし、千秋楽を終えるところの公演地へと旅立つ。毎日見に来るファンもいるため、お芝居でも舞踊ショーでも、一カ月の昼夜公演で毎回重ならないよう、違う演目をかける劇団が多い。私はもう何度も大衆演劇を見たが、芸達者な役者が多く、妖艶な女形もいて、入場料が高いと思っただけではない。

新今宮界限は上方落語や演芸とも縁が深い。かつてジャ

ンジャン横丁には新世界新花月があつて、「てんのじ村」(山王地区一帯)には芸人が住んでいた。桂ざこばが二〇〇八年末からはじめた寄席「動楽亭」(山王一丁目)は、毎月一日から二〇日まで、一四時開演で日替わりの六人の落語家が出演し、たつぷりと落語が聴ける。出演する落語家は桂ざこば一門だけでなく、関西のほかの一門はもちろん、関東から江戸落語の実力者がゲスト出演することもある。大看板が何人も出演するような日でも、入場料は二五〇〇円。ほどよい大きさの見やすい寄席なので、落語独特の細やかな仕草や目線など、落語本来の醍醐味を楽しめる。動楽亭では、毎月二〇日以降や定席の終わった夜にも、特別な落語会やイベントが開催されることも多く、ほぼ毎日のように何か楽しめる。西成区民センター(岸里一丁目)での「西成寄席」や、アマチュア落語家が英語落語を披露する「てんのじ村寄席」(山王二丁目)も、定席ではないが定期開催されている。

新今宮界限は気軽に楽しめる音楽ライブも盛んである。叶麗子や大西ユカリが活躍した通天閣地下劇場は、二〇一三年六月末に閉鎖されたが、新今宮界限には、いまなお手頃な規模の音楽ライブスペースが多い。入場料やチャージをとるところもあるが、たいてい、見る側が楽しんだら楽しんだ分だけチップを払う、という投げ銭制度で運営さ

れている。歌う側が一方的に楽しむカラオケ居酒屋も新今宮界隈には多いが、音楽ライブは次元の異なる存在で、アマチュアの出演者もいるが、見る側を意識したエンターテインメントである。音楽ライブが開催される場所としては、「新世界のこされ島」(恵美須東一丁目)、登録有形文化財「ギャラリ再会」(恵美須東一丁目)、ジャズ・レーベル「澤野工房」(恵美須東一丁目)のある新世界市場、「あなぐま亭」(恵美須西二丁目)、西成区では「Cafe Earth」(太子一丁目)などが知られている。伝説の立ち飲み酒場「難波屋」(萩之茶屋二丁目)ではほぼ毎日、ジャズドラマーの松田順司が主催する「西成ジャズ」もほぼ毎日、本拠地の「Donna Lee at KAMA PUB」(太子一丁目)か「永信防災会館」(山王三丁目)でライブを行っている。

新今宮界隈に集積するエンターテインメントは、地域の飲食店と共存共栄の関係を築き上げ、それがいまでも色濃く残っている。たとえば、オーエス劇場近くの「すし寛」(太子一丁目)に入ると、現在公演中の劇団ポスターが張り出されていて、その横に大入り袋がずらりとならぶ。オーエス劇場の緞帳には「贈 すし寛」と書かれていて、オーエス劇場の公演前後にすし寛を訪れる大衆演劇ファンも多い。すし寛だけでなく新今宮界隈の飲食店には、ドーランの残り香が漂う役者らが、タニマチ衆と入って来ることも

易宿所に外国人旅行者も積極的に受け入れる姿勢を打ちだし、新今宮界隈は、外国人も泊まれる宿泊施設が集積する地域へと変貌を遂げる。当初、他地域から新今宮界隈へ泊まりに来る日本人は少なかったもので、外国人の存在だけが注目されたが、その後は、外国人を呼び水として、日本人の観光客やビジネスマンも順調に増えた。新今宮「Tourist Information Center」(新今宮TIC)が創設された二〇〇九年頃、新今宮界隈はすでに、外国人だけではなく、日本各地からの来訪者も集う宿泊拠点へと成長していた。

かつて簡易宿所のおもな顧客であった日雇い労働者は、流動性はあるもののこの地域を拠点とする生活者か暫住者であった。ところが、新たな観光客やビジネスマンは生活者でも暫住者でもなく、海外や日本各地からわざわざ、新今宮界隈を選んで泊まりに来る来訪者か滞在者である。新今宮界隈という空間が、生活者や暫住者の閉ざされた空間から、来訪者や滞在者を受け入れることで地域の外とつながる空間へと変容したことが、このまちに劇的な地殻変動をもたらす。その兆候を察知したのは、新今宮TICの活動からであった。地域情報として、オーエス劇場のポスターを新今宮TICに貼り出したところ、大衆演劇ファンが窓口へくるようになった。名古屋方面から毎月必ず新今宮へくる大衆演劇ファンの女性は、いつも一週間くらい滞在

よくある。舞台でのお芝居や座長口上のなかで、地域の飲食店の名前が出てくることもよくある。外国人旅行者でいつも満席のお好み焼き屋「ちとせ」(太子一丁目)では、動楽亭の公演前後にくつろぐ落語家をよく見かけた。西成ジャズに出演するミュージシャンやファンは、動物園前一番街の「豊後」(太子一丁目)や、ジャンジャン横丁の「のんきや」(恵美須東三丁目)によく出没する。新今宮界隈の魅力としては、エンターテインメントだけでなく、その前後に気軽に楽しめる、美味しくて魅力的な飲食店の集積も見逃せない。

観光がまちづくりにもたらす二つの力

新今宮界隈には、もうひとつの欠かせない地域資源が存在する。それは西成区に多い簡易宿所ほか、ホテルや民泊など宿泊施設の集積である。エンターテインメント、飲食店、宿泊施設、この三つがともコンパクトに集積するという地域特性は、日本全国でも珍しい。簡易宿所はかつて日雇い労働者の生活の場であったが、二〇〇〇年以降、廃業や福祉マンションへ転業するところがあいついだ。簡易宿所街が存亡の危機に瀕するなか、二〇〇五年創設の大阪国際ゲストハウス地域創出委員会(OIG委員会)は、簡

して、新今宮からいろいろな劇場を行き来して過ごす。彼女が新今宮を宿泊拠点にする理由は、新今宮からならいろいろな劇場へ行け、いろいろな劇団や役者を見られるからであった。新今宮界隈において、五つも存在する大衆演劇の劇場は、お互いお客を奪い合う関係にある。しかしながら、他地域からの来訪者は、五つの劇場が集まっていることを魅力と感じ、安くて美味しい飲食店も多く、安心して泊まれる簡易宿所が存在するから、新今宮界隈を宿泊拠点として選ぶ。

日常の消費と観光の消費は質が異なる。商圏が限定される日常の消費では、エンターテインメントでも飲食店でも、同業者はかぎられた商圏の顧客を奪い合う競争・競争関係にしかなり得ない。閉ざされた空間でかぎられた顧客を奪い合うと、事業者たちは自分の顧客を囲い込み、地域を分断しようとする。ところが、国内でも海外でも、他地域から来訪者や呼び込む「観光」の文脈からは、他地域との地域間競争こそ発生するが、その地域内の多様性や選択肢の多さが魅力となるため、互いの存在を認め合い協働・協力する関係が芽生える。地域全体のポテンシャルを高めるためには、地域内のさまざまな主体が協働・協力して地域間競争で優位にたち、地域の総合力で他地域から来訪者を呼び寄せる。そのあとは地域内でお互いの競争力を高め合

い、それがさらに地域全体のポテンシャルを底上げしていく。こうした好循環こそが、観光がまちづくりにもたらす力であり、地域内の事業者は、競争・競争から協働・協力との関係へと移行できる。大阪市が二〇一七年からモデル事業として推進を試みる「Tourism Improvement District (TID)」の発想は、まさにここから生じている。

加えて、他地域からの来訪者、とくに外国人旅行者が、既存の行政境界や地域概念をまったく意識していない点も、まちづくりで重要な地殻変動をもたらす。たとえば、大阪の中心地をどう呼ぶのか、大阪か梅田か、天王寺か阿倍野か、なんばか難波か。こうした複数の地名の存在は、競争・競争から生じた分断の象徴である。区境がJR大阪環状線と重なることの多い大阪市では、京橋、鶴橋、新今宮ほか主要な駅で、環状線の外側に降りるか、内側に降りるかで区が変わる。大阪で副都心となる核が育たないのは、拠点となるべきJR大阪環状線主要駅が、区境で分断されているからにはかならない。理由はどうあれ、外からの来訪者にとっては、ただややこしいだけである。

釜ヶ崎、あいりん、西成、浪速、新今宮、私たちは既存の地域概念に絡め取られているが、来訪者たちは決してそうではない。どのような主体がどのような空間的広がりを用意して来訪者を受け入れても、来訪者はその広がりとは

異なる空間認識をもって来訪する。新今宮界隈は、北は日本橋・大国町から千日前・道頓堀、東は天王寺・阿倍野と隣接し、太子交差点からあべのハルカスはよくみえるし、日本橋の南端もみえる。歩いて移動する外国人旅行者は、身体的連続性から、そうした隣接地域も同じ地域ととらえている。より多くの来訪者を呼び込もうとするならば、そうした隣接地域もふくめてひとつの地域ととらえて、地域内での回遊性を高める戦略が望ましい。これこそ、観光がまちづくりにもたらすもうひとつの力であり、地域の不毛な分断から、地域内だけでなく、隣接地域もふくめた地域の統合や再編が促される。二〇一九年春に大阪商工会議所が「グレートミナミの活性化に向けて」という提言をまとめたが、この発想の源泉はここにある。

つなげて広げる観光まちづくりの実践

観光がまちづくりにもたらす二つの力、競争・競争から協働・協力へ促す力、地域の分断から地域の統合・再編へ促す力は、二〇一〇年頃、企業や行政の観光担当者でも、ごく一部の人しか理解していなかった。また、特定の業界や事業者が地域へ協働・協力を呼びかけるのは憚られ、観光行政も当時は、境界を超えた統合や再編への働きかけを

躊躇った。地域をつなげて広げる観光まちづくりを実践するには、しがらみのない中立的な立場からの働きかけが不可欠である。新今宮界隈で唯一その役割を担えたのは、学生ボランティアが運営する新今宮TICであった。

最初の実践として、浪速区と西成区の行政境界を乗り越え、新今宮界隈の来訪者や滞在者を、エンターテイメント・飲食店・宿泊施設の三大地域資源へつなげたい、という想いから、二〇一一年三月、「新世界・西成 食べ歩きMAP」を大阪商工会議所との協働で発行した。二〇一二年一月には、新今宮TICが「西成ライブエンターテイメントフェスティバル二〇一二」を仕掛けた。このイベントの着想は単純で、「西成は日常的にライブエンターテイメントで溢れているまち」なので、それらを個々バラバラではなく一括宣伝して、このまちにはいつきてもどこかで必ずライブエンターテイメントがみられる、という地域イメージを創造しようという試みであった。具体的には、オーエス劇場、鈴成り座、梅南座、動楽亭、西成ジャズのポスターやスケジュールを、日本語と英語でA4裏表印刷の一枚もののチラシにまとめ、新今宮界隈の宿泊施設で全宿泊客に配布して、外国人旅行者をライブへ誘うツアーを新今宮TIC主催で行った。二〇一三年夏には、浪速区の浪速クラブ、朝日劇場も加えて、西成ライブエンターテイメン

トフェスティバル二〇一三を行い、その後は、新今宮TICで常時、すべてのエンターテイメント情報を集めて宣伝するようになり、フェスティバルとしては開催していない。二〇一二年末から二〇一四年くらいは、西成特区構想との絡みから、さまざまなメディアで西成特集がよく組まれたが、新今宮TICが取材窓口となることも多く、その場合は必ず地域のエンターテイメントへとつないだ。

話は前後するが、二〇一二年一〇月、OIG委員会と新今宮TICを核に、南海電鉄、阪堺電車、JR西日本を加え、大阪商工会議所をオブザーバーに迎えて、新今宮地区観光まちづくり推進協議会が創設された。同協議会が二〇一三年春に発行した『大阪・新今宮ガイドブック (OSAKA・SHIN-IMAMIYA GUIDE BOOK)』は、新今宮界隈を宿泊拠点へ育てるべく、来訪者や滞在者がこのまちでの滞在を楽しむ、このまちから公共交通機関を利用して、大阪・関西や日本各地を周遊するよう誘う、という視点で企画編集された。同協議会は新今宮TICとの協働で、新今宮から、南海電鉄を利用しての高野山 (二〇一三年九月)、阪堺電車を利用しての住吉大社・堺 (二〇一三年一〇月)、JR西日本を利用しての城崎温泉 (二〇一四年二月) と、外国人旅行者を募ってモニターツアーも行った。アートもこの頃から地域に根づきはじめる。大阪市の芸

術まちづくり拠点事業としてはじまった「ブレイカープロジェクト」は、二〇一一年一〇月に創造活動拠点「新・福寿荘」(山王一丁目)を設け、その後も西成区内でさまざまな活動を展開している。フェスティバルゲートから動物園前商店街へ二〇〇八年に移転してきた「NPO法人こえ」とことばとこころの部屋(ココローム)は、地域に住む人や来訪者を広く受け入れて、表現する素晴らしさを伝える活動を続けている。二〇一三年春からはじまった「釜ヶ崎グラフィティアートプロジェクト」は、地域住民からの依頼に応じて、萩之茶屋地区のシャッターを中心に、スプレーでアート作品をつぎつぎと描いた。この潮流に乗るかたちで、西成アート回廊プロジェクト実行委員会が二〇一四年六月に立ち上がり、西成出身ラッパーのSHINGO★西成を総合プロデューサーとして、Nishinari Wall Art Nippon(西成WAN)が動きはじめた。西成WANは、①違法な落書きを消して合法的なアートを描こう、②わざわざ人が見に来るようなアートを描いて安全・安心につなげよう、という趣旨のもと、二〇一五年から二〇一九年夏まで、七回のアートイベントを主催して、多くの作品を残してきた。

新今宮界限と西成特区構想の今後にもつて

ここまで新今宮界限のポテンシャルと、民間主導で進むまちづくりとかかわる動向をのべてきたが、二〇一二年末からはそれらと並行して、西成特区構想の関連事業も進展する。まちづくりという観点から、特区構想のなかで影響の大きかったのは、大阪府・大阪市と大阪府警の連携で、二〇一四年秋からはじまった環境整備事業であろう。あいりん地区の環境整備事業では、不法投棄されたごみを回収して監視を強め、通学路を中心に違法な露天商を取り締まり、覚醒剤などの薬物取引や賭場を徹底的に取り締まった。事業開始からわずか数カ月で、ごみの不法投棄は減り、密売人と思われる人物や賭場の見張り番などが路上から消え、地域の基礎体力ともいえるべき「安全・安心」が目に見えて回復した。一連の環境改善事業は一過性で終わることなく、地域からの強い要望をうけて、その後も維持されている。結果として、あいりん地区でも、外来の旅行者がカメラを首からぶら下げて、スリッケースを引いて歩ける環境が生みだされた。折からのインバウンド時代の到来がこの状況と重なる。

インバウンドがアウトバウンドを凌駕した二〇一五年以降、新今宮界限でも新たな宿泊施設の開業があいつぎ、星

野リゾートの進出が決まり、違法なものもふくめて民泊を運営する者が続出する。山王地区や三角公園周辺の木造低層住宅街にも民泊ができたため、外国人旅行者の行動範囲は、従来の太子地区や大通り沿いから、あいりん地区全域へと一挙に広がった。そうした背景として、環境整備事業で地域の安全・安心が高まった点は重要であるが、特区構想でインバウンド受け入れ整備とかかわる事業は、簡易宿所の設備改善に対する助成くらいであった。新今宮界限での新たな宿泊施設や民泊の開業ラッシュは、民間の外部資本が地域のポテンシャルを評価して投資したから発生したものであり、特区構想よりも、インバウンド時代到来による宿泊需要増の影響が大きい。

特区構想では今後、まちの新陳代謝を高めて地域へ人と仕事を呼び込み、それらを既存の三大地域資源などとネットワーク化して、地域のポテンシャルをさらに向上させることが望まれている。特区構想有識者提言の「にぎわい創出地域交流モデル」では、屋台村事業、商店街拠点再生事業、イベント交流事業体制と広域ネットワークの構築などが事業提案されている。これらの成否は、このまちのいまあるポテンシャルを活かして、子育て世帯や若者がこのまちでチャレンジできるような環境を生みだせるのが鍵となる。新今宮界限はすでに、閉ざされた日常消費の空間か

ら、外から人を呼び込める観光消費の空間へと移行しつつあり、近い将来、曜日や時間帯にかかわらず、商業やビジネスを常に展開できるようになるであろう。新今宮界限はほぼ全域が都市計画上の商業地域で、そのなかに木造低層住宅が密集する居住空間も広がっている。新今宮界限の一部地域ではもうすでに、特区構想とは別の文脈で、特区民泊認定を前提とする住宅やマンションの改装や新築があいついでいる。居住空間に観光消費の商業化の波が押し寄せると、地域の文脈とはかわりがない、外からの開発が進む可能性も高い。

今後のまちづくりでは、行政でコントロールできる事業を見極めて、安易なジェントリフィケーションの発生を抑止する施策を打つとともに、まちで生みだされた利益の一部をまちづくりへ還元する仕組みづくり、いわゆるエリアマネジメントがとて重要となる。ただ、特区構想はあいりん地区を中心として西成区だけをみていて、新今宮界限という発想や、周辺地域もふくめた統合や再編という視点は欠落している。現実には、隣接する浪速区でも、阿倍野区でも、天王寺区でも、大正区でも、インバウンド時代の到来ですでに地域変容が生じつつある。うめきた二期のまちびらき、IR誘致、万博開催、なにわ筋線開通にむけて、もつと大きな地域変容が予想される。新今宮界限も特区構

【市民自治講座第Ⅰ期記録】

NPO政策研究所《市民自治ブックレット》01

民主主義再考——原理的に考える

岡本 仁宏
関西学院大学教授

- 第1回 自由と平等から民主主義を考える
- 第2回 ナショナリズムから民主主義を考える
- 第3回 市民社会から民主主義を考える

【市民自治講座第Ⅱ期記録】

NPO政策研究所《市民自治ブックレット》02

トクヴィルと《平等》の政治力学

富永 茂樹
京都大学名誉教授

- 第1回 中央集権、地方自治、中間集団
- 第2回 平等の力学——その逆説
- 第3回 トクヴィルと近・現代の日本社会

【市民自治講座第Ⅲ期記録】

NPO政策研究所《市民自治ブックレット》03

これからの自治体文化政策——市民・都市・経済を考える

中川 幾郎
帝塚山大学名誉教授

- 第1回 なぜ、いま文化政策か
- 第2回 文化のまちづくりとその担い手を考える
- 第3回 文化政策をめぐる諸問題と論点の明確化

市民自治ブックレットは500円（送料別）で販売しております。
ご注文は下記NPO政策研究所まで。

発行 特定非営利活動法人 NPO政策研究所
〒540-0038 大阪市中央区内淡路町2丁目3番14号
日宝グリーンビル3階2号
TEL・FAX：06-6809-3125
E-Mail：npa@post.email.ne.jp

想も、近い将来、既存の地域概念に絡め取られることなく、大阪市、大阪府、関西、日本という広域の視点から、あるべき地域の広がりや役割や機能の検討が迫られるであろう。西成が変われば、大阪が変わり、日本も変わる、これは当然のことである。と同時に、閉ざされた空間から外とつながる空間へ変容した現在、日本が変われば、大阪も変わり、西成も変わらざるを得ない、という外からの圧力は否応なく今後も高まる。エリアマネジメントの発想は、そうした否応なく高まる外圧にやみくもに抗するのではなく、しなやかかつしたたかに受け入れて連携をはかり、このまちのポテンシャルを活かしてさらに高めようとするものであり、その実現が期待される。

(注)

- (1) 松村嘉久「外国人旅行者が集い憩うまち釜ヶ崎へ」原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編『釜ヶ崎のススメ』洛北出版、二〇一一年、三四五～三六九頁。
- (2) 松村嘉久・佐藤有・有村遊馬「新今宮観光インフォメーションセンター設立の経緯と運営戦略」『国際ゲストハウス地域の創出に向けた活動報告その1』『日本観光研究会第二四回全国大会論文集』二〇〇九年、三三三～

三三六頁。二〇一八年一月から場所を移転して、新今宮AIC (Area Information Center) として運営を続けている。

(3) 「定住する明確な意思はないが、どこかへ帰る明確な予定もなく、長期間暮らす者」という意味で、定住者と滞在者の間を埋める用語として、筆者が使いはじめた。現代中国の人口統計概念の「暫住人口」からヒントを得た。

(4) ブレーカープロジェクトの詳細は、①雨森信「アートと地域をつなぐアートマネジメントの実践（特集 都市大阪の磁場：変貌するまちの今を読み解く）」『市政研究』一八六号、二〇一五年、八九～九五頁、②Breaker Project (<http://breakerproject.net/>)を参照いただきたい。

(5) ココロームの活動は、上田假奈代『釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココローム』フィルムアート社、二〇一六年、二二九頁、を参照いただきたい。

(6) 松村嘉久「西成 Wall Art Nipponの実践と意義」『第三一回日本観光研究会全国大会学術論文集』二〇一六年、四九～五二頁。